

無知の病

— 根本蒼汰 —

00 プロローグ

ふと、時計に目をやると、時刻はもう23時を回ろうとしていた。

あれから1時間くらいは経っていただろうか。

いつもは20分くらいで済むのに、妻はまだ風呂から出てきていなかった。

急に嫌な予感がこみ上げ、あわてて浴室へ向かう。

ドアを開けた途端、妻の姿が目に入ってきたことで安堵するが、しかし、すぐにその異変に気付く。

風呂に入ったはずなのに、身体をガタガタ震わせながら、妻がしゃがみ込んでいたのだ。

「ごめん・・・、もう耐えられないよ・・・」

暗い脱衣所で、身体を濡らしたまま、声を震わせ、泣きながら、妻が言った。

この時の光景は、いまでも僕の脳裏に強く焼き付いている。

2月のとても寒い夜のことだった。

数ヶ月の料金滞納が原因で、とうとうガスが止められていた。

そうとは知らぬ妻は、疑いの余地なくシャワーの蛇口をひねった。

普段、妻はちょっとやそつとのことでは決して弱音を吐かない。

しかし、いつまで続くかわからないこの絶望的な状況は、妻の天真爛漫な性格さえも破壊した。

投資に失敗し、

借金を借金で返し、

僕はあっさりと多重債務者になった。

家計は絶望的な状況だった。
ありとあらゆる支払いが滞った。

家賃、携帯電話、電気、ガス、水道……。

日に何度も掛かってくる督促の電話は、もはや他人の携帯が鳴っているかのような錯覚に陥っていた。ポストに届く財産差し押さえ通知は、いつしか、封さえも開けなくなった。

人一倍おしゃれが大好きだった妻には、リサイクルショップの数百円の洋服ですら、購入を躊躇ためらわせた。

銀行の預金残高が千円を切った。

僕はもう、何をどうすれば良いのか、まったくわからなかった。

「俺の人生を狂わせたものはいったい何なのか……」

当時の僕には、その理由がきちんと理解できていなかった。

わかっているようで、本質的なところは全然わかっていなかった、と言ったほうが正しいかも知れない。

でも、いまの僕にはその答えが分かる。

投資に失敗し、なるべくして多重債務者になり、「人生の底」に落ちた理由。

それは、無知。

無知だ。無知こそが、諸悪の根源だった。

30歳までの僕の人生を一言であらわすと、無知というこのたったひとつの言葉に集約できる。

大事なことなので最初にお伝えしておくが、

無知は損をする

遠回りをする

そして、時に誤った道へ進んでしまうこともある

ということ。

心を腐らせ

視界を狭め

さらに無知を拡大させる

無知は本当に恐ろしい。

最近では、自分がおこなっているビジネスを通して、多種多様な生き方をしてきた方たちとお話をさせて頂く機会に恵まれているが、僕ほど無知をこじらせた人にはなかなか遭遇しない。

いまこうして、過去の自分が考えていたことや、たどって来た過程を振り返ってみると、(それらはすべて、紛れもなく自分の事なのだが) その無知さや、考えの至らなき、甘さに、心底呆れてしまう。

これを読んでくださっているあなたも、本文を読み進めていくにつれ、

「これ、マジなの？」

「ホントにこんなことも知らなかったの？」

と、思わず苦笑してしまうようなエピソードを何度も目にすると思う。

幸いにして、いまの僕はそういった過去とは決別して、当時、どうあがいても手にできなかった当たり前のことや、叶えたいと思っていたことができるようになっていく。

生活にかかるお金を遅滞なく払うこと

知らない番号からの着信にビクビクしないこと

たまに会う両親に食事をごちそうできること

子どもたちと毎日一緒に食卓を囲むこと

妻がいつも笑顔でいてくれること

一見、ごくごく普通のことばかりにしか見えないかも知れないが、ほんの数年前まで、僕はこのごく普通のことさえ叶えることができなかった。

先日、僕の過去をよく知っている友人と飲んでいた時に、

「あの頃のお前は本当に、目が死んでた」

「放つといったら、家で心中でもしちゃうんじゃないかって、ヒヤヒヤしてた」と言われた。

そんな最悪の状況から、僕はあることをきっかけにして、学び、変わることができた。

人生に絶望していた僕に、希望を与えてくれたもの。無知で、終わっていた僕に、「底」から這い出すきっかけを与えてくれたもの。

それは、インターネットビジネスだ。

インターネットビジネスと出会ったあの日から、僕の人生は確実に変わり始めた。

と言っても、すぐに状況が変わった訳ではなく、現在に至るまでの間にはいくつもの困難があった。挫折もしたし、数えきれないくらいの失敗もした。

それでも、少しずつ、わからないことをひとつずつわかることに変え、積み重ねてきた。無知の自分を少しずつ、変えてきた。

いまはもう、毎月の支払いのために仕事をするといった、いわゆる、お金の追われるような生き方はしていない。

インターネット上に作った仕組みが毎日収入をもたらしてくれるようになったことで、人生の自由度が格段に上がったのだ。

例えば、平日に旅行へ行くにしても、時間とお金さえあれば、たいていの場所ならいつでも自由に行ける。だが、会社勤めをしている頃は、そう簡単にはいかなかった。理由を告げるといふ、ただそれだけのことでさえも、無駄に神経をすり減らさなくてはいけなかった。

他にも、朝起きてその日のスケジュールを自分の好きなように決められることも、よくよく考えてみると相当に自由度が高い生き方と言えるだろう。

僕がおこなっているインターネットビジネスは、ネットに繋がる環境とパソコンさえあれば、世界中どこにいてもできるため、職場が固定化されていないという意味でも、かなり自由である。

まとめると、インターネットビジネスのおかげで、僕は、

金銭的自由
時間的自由
精神的自由
身体的自由

を手に入れることができた。

これら4つの自由を同時に、しかもたったの数年で得ることができたのは、間違いなくインターネットのおかげだ。この時代に生まれることができ、本当に良かったと思う。

本書では、無知だった僕が、

あらゆる面で損をしてきたこと
遠回りしたこと
誤った道へ進んでしまったこと

を書いていく。

そして、無知で何もわからなかった状態から、

何を学び

どんな行動をして

現在に至ったのか

についても書いていこうと思う。

インターネットビジネスに出会ってからちょうど5年の歳月が経った。人生に絶望していたあの日からほんの数年で、自分の人生がまさかこれほどまでに変わるとは、まったく想像できなかった。

ここから先に書かれていることの中には、おそらくあなたが信じている常識とは大きくかけ離れたことも書かれていると思う。

もちろん、それらすべてをあなたに押し付けたい訳ではない。現代のひとつの生き方として、こんな生き方もあるのだと、知ってもらえればそれで十分だ。

無知をこじらせ、人生に悩み、もがき苦しみ、遠回りをしながらも、ちょっとした勇氣と行動によって、人生を軌道修正できた僕のエピソードが、何かに挑戦しようとしているあなたに、自分自身に迷っているあなたに、ほんの少しでも勇氣を与えることができれば、それほど嬉しいことはない。

目次

- 00 プロローグ
- 01 金持ちの家に生まれるか宝くじ当選か
- 02 夢を打ち碎かれた最初の講義
- 03 執筆中（近日公開）

01 金持ちの家に生まれるか宝くじ当選か

生まれてから高校を卒業するまでの18年間、僕は茨城県で生まれ、育った。

大手企業に勤めるサラリーマンの父と専業主婦の母、4歳年上の姉、そして僕の4人家族。決して金持ちではない。かと言って貧乏でもない。どこにでもあるような、ごくごく普通の中流サラリーマン家庭である。

まじめに働く父のおかげで、幼少期にお金に苦しんだとか、やりたいことをやらせてもらえなかった、といった話はない。むしろ、好き勝手にやらせてもらえたほうだと思う。

大人になってから仲良くなった人の中には、極貧家庭の中で幼少期を過ごしたとか、かなり複雑な家庭環境で育った、といった壮絶な過去を持つ人もいるので、そういった人たちに比べれば、いかに自分が恵まれた環境で育ったのかを実感する。

だが当時は、自分がそんなヌルい環境にいるなんて自覚できなかつたし、己を客観視するような教養も持ち合わせていなかった。

それどころか、自分より潤っている家庭のことを羨んだりしていたくらいだ。わかりやすく言うと、金持ちの家の友達が羨ましかった。

小学生の頃、H君という同級生の友達がいた。家がとても近かったので、小学生の頃は毎朝一緒に登校していた。

H君の家はいわゆる金持ちだった。H君のお父さんは不動産業や青果の卸売業をやっていたようで、とにかく家がでかく、車を何台も所有していた。

これが、僕が人生で初めて出会った「お金持ち」である。

H君の家には楽しいものがたくさんあった。

アンモナイトの化石、本格的な天体望遠鏡、顕微鏡、ホームシアター……。

H君が自ら望んで買ってもらったのか、それとも親の意向だったのかは定かではないが、とにかくそうだった、僕の家にはまず絶対に存在し得ないもので溢れていた。

H君のお父さんはとても優しい人だった。一方で過保護な面もあった。

例えば、雨の日の登下校。H君は必ず車での登下校だった。小雨はもちろん、ちょっとでも雲行きが怪しければ車で送り迎えをもらっていた。

(別にそれが良いとか悪いとかの話ではない。価値観なんて人それぞれで、他人がとやかく言うところではない。ただ単に、僕の家とはあまりにもかけ離れた考え方だった、という話。)

そんな状況に対して、僕は嫉妬や羨望の感情を抱いていたかという点、むしろまったく逆。

家が近かった僕はしょっちゅう同乗させてもらっていたので、むしろ「H君の近所に住んでいる俺はなんてラッキーなんだ！」くらいに思っていた。

雨の中、傘をさして登下校する他の子供たちを車内から眺め、心に抱いたあの感情は、まさに優越感そのもの。

まるで自分も金持ちになったような気分だった。

なるほど、金持ちは好きなものを何でも手にするらしい。

金持ちは雨の日でも快適に移動するらしい。

少年だった僕は、金持ちに対して漠然とした憧れを抱いた。しかし一方で、自分には絶対に訪れることのない世界の話だとも思っていた。

なぜそのように思っていたかの理由がさつそく無知すぎてやばいのだが……。
つまり金持ちというのは、金持ちの家に生まれるから金持ちになれる。

金持ちになるには、

金持ちの家に生まれる

宝くじに高額当選する

このいずれかしか方法はない。それしか知らない。だからそう思い込んでいた。

無知な僕はやがて中学、高校を卒業し、一年間の浪人生活を経て、大学入学にともない上京する。しかし、大学生になった僕は、徐々に無知をこじらせ始めていく。

02 夢を打ち砕かれた最初の講義

「将来は絶対に東京で生活する」

中学生の頃から、僕は東京に対して強い憧れを抱き始めた。

「将来は必ず東京へ出て、東京で仕事をして、東京で生きるんだ」と心に決めていた。

当時の僕にとっての東京とは、ありとあらゆるモノが揃っている場所。

それは物質的なモノだけではなく、可能性を広げてくれる機会や経験といった、目には見えないモノ。そういった無形のモノまで様々だ。

何かよくわからないけど、とにかくそこへさえ行けば、田舎では決してなることができな
い自分に变身させてくれる、そんな竜宮城のような世界を期待し、心をときめかせていた。

良く言えば純粹。

悪く言えば無知。ただの世間知らずである。

そんな田舎者の僕は、高校生になった頃から自分の部屋をオシャレにすることにハマっ
ていた。

インテリア雑誌や部屋のカスタマイズ雑誌などを買ってきては、それを参考にしながら
自分の部屋を改造する。そんなことをやるのが好きだった。

この趣味が派生して、という訳でもないが、そのうち建築家という職業に憧れ始めた。

「自分が描いた設計図が現実の建物になって、地図に残る仕事。カッコ良すぎる・・・」
と思っていた。

その夢を実現するために、大学では建築学を専攻することにした。

しかし入学後、夢と希望を持って臨んだ最初の講義で、僕の夢はあっさりと打ち砕かれる
ことになる。

入学後の一発目の講義だから、ほぼすべての新入生が出席していたと思う。僕以外の学生
も、その大半は僕と同じような気持ちで最初の講義にワクワクしていたことだろう。

そんなウブな学生たちに対して、教授はこんなことを言った。

「あのねー、この中の大多数が目指している一級建築士ね。あれ、合格できるのはごくわ
ずかです。当たり前だけど。でね、さらにそこから、建築事務所を開業するなどして、いわ
ゆる建築家としてまともにメシを食っていけるのは、まあ、1人いるかないかなんですよ
ね。つまり、ここにいるほとんどの人は、いま描いている夢を実現できないってことです
(笑)」

「そんな身も蓋もないことを言う教授なんて本当にいるの？」と思われるかも知れない。しかし確かに、あの教授はこのような主旨の話をしたのだ。

僕は驚愕した。まさに寝耳に水である。

話はその後も続いていった。もしかしたら教授の話の主題はもっと別のことで、この話は前フリ的に言った一言だったのかも知れない。

しかし、当時の僕にとっては、その一言があまりにも衝撃的すぎて、他の話が一切残っていない。

言われたことは確かに正論。しかし、ウブだった僕はその正論を一面的に捉えることしかできなかった。

衝撃の事実を聞かされた僕は、絶望と不安、そして焦燥感でいっぱいになった。明るくて、希望しかなかったはずの僕の未来は、音を立てて崩れていった。

その日以降、大学へ行くモチベーションや、夢そのものに対するモチベーションが一気に下がってしまった。

いまとなれば、そんなオジサンに言われた一言で崩れてしまう夢など、最初から本気じゃなかったんだろうと思うし、それを聞いて、「じゃあどうすれば、そのひと握りになれるのか？」と考えられなかったという意味では、極めて狭い世界しか知らず、視野が狭すぎたといえるような気がするが……。

いずれにせよ、僕は入学早々にして、それまでとは違う何かを探し始めざるを得なくなっ

【無料で読める】[根本蒼汰の公式メルマガはこちら](#)